

# 前蜀政權について——「唐の名臣世族」と養子假子を中心に——

大兼 健寛

はじめに

一、前蜀政權樹立までの概要

二、前蜀政權の先行研究

三、前蜀の「唐の名臣世族」と知識人

四、王建の養子假子たち

結び

## はじめに

五代十國期は、安史の亂以後、衰弱の一途を辿る唐朝が、後梁によつて帝位を篡奪されたことに端を發する。その後、後梁から後唐・後晉・後漢・後周と中央政權が目まぐるしく代わり、北漢と燕及び岐を除けば、江南地方や四川・荆南地方等に王と稱したり、皇帝を稱したりする君主達の國々（呉・南唐・前蜀・後蜀・呉越・楚・南漢・北漢・閩・荆南の十國）が亂立し、北宋が中國を再統一するまでの間、續くことになる。その中で、四川地方には時期を前後して二つの政權が建てられた。前蜀と後蜀の二政權である。

前蜀の開祖は王建という人物で、若い頃無頼をはたらいていたが、忠武軍に入軍して頭角を現し、唐末の四川を領有し唐から蜀王を授けられるまでに至った。その唐が滅亡し、後梁が建国されたのを機に自ら皇帝を名乗り、領有していた四川地域を「大蜀」と號し、中央政權と目されていた後梁と外交上對等に渡り合った。五代十國期によく見られる無名の者からの成り上がりであり、大變興味深い人物でもある。

先行研究を踏まえれば、前蜀政權とは唐朝中央官僚制に基づき、主に亡國の臣下であった「唐の名臣世族」及び知識人集團と、王建との仲間意識からなる養子假子を中心とした武臣集團（職業軍人的アウトロー集團）とが、政權の表層面に現出する。しかし、政權の實態としては、民政と財政とが不在であり、それを擔っていたのが縣令以下の官吏たちであったとされる（先行研究も含め後述）。

本稿では、王建の養子假子と「唐の名臣世族」を中心に、先行研究を踏まえつつ筆者の補足を交え、前蜀という政權を論じてみたい。

## 一、前蜀政權樹立までの概要

本論に入る前に、王建が前蜀政權を樹立するまでの経緯を記しておこうと思う。筆者が史料から当たり障り無く纏めてみた。（尚、本論文では、當時のことを調査する上で基本になる史料として、『舊五代史』『新五代史』『資治通鑑』は中華書局本、『十國春秋』は『五代史書彙編』（杭州出版社・二〇〇四、五）に收められているものを使用し、『蜀檮杌』に關しては『蜀檮杌校箋』（巴蜀書社・一九九九、一）を使用したことを附しておく。

前蜀の先主 王建、字は光圖、出身は許州舞陽とも陳州項城ともいわれる。若い頃は驢馬を盗んだり私鹽を

密賣したり強盜を働いたりと無頼な生活を送っていた。郷里の人からは「賊王八」と徒名されていた。そして許州忠武軍に所屬し、軍功を立て頭角を顯わし部隊長となり、やがて鹿晏弘等と共に楊復光の下で黃賊（黃巢の亂の賊徒）を討伐することに従う。

黃賊を驅逐した後、楊復光は王建等の部隊を八つに分け八都（各部隊千人）とし、王建は鹿晏弘等と同じく一都の隊長となった。その後王建等八都の隊長の内、五人の隊長はその統率する兵を連れ、黃巢の亂の爲に都長安から逃れて西避していた僖宗を迎えると聲言し西に向った。王建等と合流した僖宗は大層喜んで、彼等に「隨駕五都」の稱號を與え、（その當時權力を握っていた宦官）十軍勸軍容使田令孜に彼等を預けた。田令孜は王建等五都の隊長を得て自分の假子とした。

僖宗が長安に還るに及んで、王建等は神策軍將（近衛隊將）として僖宗の側に仕えた。その後、田令孜が河中の王重榮と鹽池を争ったことにより、王重榮が晉軍（異民族である沙陀族を中心とする軍團。李克用の軍團等がそれである）を召喚したことにより長安は混亂をきたし、僖宗はまたも鳳翔に幸し、次いで興元に幸することとなり、王建は清道使という官職を授かり、玉璽を携え僖宗に従った。當塗驛という地では、裏切った李昌符等が棧道に放火したが、王建は炎の中を僖宗を守りながら見事通り抜けた。

興元に到着してから、田令孜は唐朝皇帝である僖宗を播越させたことは己に起因するので、罪を着せられるのを懼れ西川節度使である同母弟の陳敬瑄の元に監軍として行くことを要請し、自分の代わりとして楊復恭を十軍勸軍容使の職に充てた。

楊復恭の配下になった王建は彼に疎まれ、壁州刺史（壁州刺史ともある）として追い出された。その際、蠻族や亡命の衆を集めて蜀の地を暴れてまわった。それを患えた陳敬瑄が王建の義父である田令孜に相談した結

果、王建を召喚しその幕下に置けばよいとのこととなり、王建に召喚したいとの旨を傳えた。王建はそのことを喜んで、舊知である顧彥朗に家族を託し西川節度使の本據地である成都に向う。

しかし、陳敬瑄が心變わりして軍備を整え王建を拒んだ爲に戦闘となり、王建は陳敬瑄が繰り出す迎撃軍を盡く破つていった。そして唐朝からの停戦講和を退け、そのまま成都を陥して、田・陳の二人を殺し、唐朝から正式に西川を管轄する官職を授けられた。王建は西川という確固たる地盤を初めて手に入れたのである。

その後、唐朝から東川を預かる舊知の顧彥朗が死に、弟の顧彥暉がその後を繼ぐと、策略により東川までもその手中に入れ、蜀の兩川の地を併せ有することとなる。そして北は岐王李茂貞から山南西道の地を、東は三峡の地までを併吞し、巴蜀廣域を勢力下に治めていった。

王建は飽くまでも表面上は唐の臣下であることを守り通していた。しかし、後梁が唐から帝位を篡奪したことに、遂に仕える王朝が滅亡してしまつたとして、王建は蜀の地で皇帝を稱し、自らの王朝を建てるのである。

とならうか。(参考にした各史料によつて年號がまちまちな爲、ここでは敢えて省いた)<sup>(四)</sup>

## 二、前蜀政權の先行研究

前蜀政權というものに對して具體的な考證を行つてゐる先行研究は管見の限りそう多くはない。松井秀一氏が「唐代前半期の四川―律令制支配と豪族層の出現を中心として―」<sup>(五)</sup>の中で、唐代全期を通して、四川地方は中央から蠻族のような蔑視的扱いを受けていたとし、また「唐代後半期の四川―官僚支配と土豪層の出現を中心として―」<sup>(六)</sup>に

において、前蜀の四川地方支配の樹立に關することを論ぜられている。松井氏論文の後者本文を引用してみれば、

王建は唐代後半期の四川地方の經濟的發展を背景に、武將・土豪層を中核とする封建的な在地勢力と傳統的な王朝官僚支配の權威とを巧みに結合して前蜀政權を樹立したのである。

となる。松井氏は、唐代後半期における四川地方の混亂と經濟の展開、及び權力争奪戰の勝者である王建への封建的な姿勢を取る在地勢力とを結び合わせ、四川地方の特徴を述べられている。

さらに松井氏は同論文の中で、唐代全期を通して蔑視されてきた四川地方で、唐代末期に他地域では失墜してしまつた唐朝の權威と唐王朝の官僚制とを自己の勢力に組み入れ、正統性を獲得しようとした集團の勝利者が王建集團であつた、としている。それを踏まえれば、四川地方においては、中央から蔑視的扱いを受けていたとしても、中央への憧れや羨望の眼差しは消えることはなく、唐末五代初期當時においても四川地方の人々は唐朝という舊王朝權威に對する歸屬感を有していた、と言えよう。

續いて、佐竹靖彦氏は氏の論著である『唐宋變革の地域的研究』<sup>(6)</sup>の第IV部「四川地域の變革」の中で前蜀の政權としての在り方とその構造とに言及している。佐竹氏の論文が現在最も詳細に前蜀政權について言及しているものと思われる（佐竹氏は前蜀を指して王蜀というが、本稿では佐竹氏論文の引用箇所以外は前蜀とする）。

佐竹氏は、『唐宋變革の地域的研究』中の「王蜀政權成立の前提について」において、唐朝末期の混亂の中、前蜀政權成立以前の王建の生活史と王建集團の構造とに言を費やしている。佐竹氏の言う王建集團とは、王建を頂點とした義兄弟・假父子の兩關係の組み合わせによって成立する結社的集團のことであり、それは職業軍人的アウトロー集團（ゲゼルシャフト的結合であると佐竹氏は捉える）でもあつた。この集團は、社會のさまざまな階層の出身者を受け入れる開放性と、假子等の集團的利益への献身、集團的利益の保障者としての王建の統率への信頼と服

従によつて維持される集團的結集、集團的閉鎖性を會わせもつていたとしている。

さらに佐竹氏は、「王建集團出現の第一の基礎は、全國的な商品流通の發達とその一部に對する唐朝の統制政策に、第二の基礎はこのような商品流通に對する地域的保障と統制の體制、すなわち新しいかたちの藩鎮權力の成長にあった」という見解を提示されている。

そして同著「王蜀政權小史」の中で、前蜀政權の構造というものを三つのカテゴリーに分けられている。

(一) 中央文臣官僚（「唐の名臣の世族」や文學の士）。滅亡した唐朝の文物や制度（唐の文臣官僚制等）を繼承する際、一種の裝飾品的役割を擔つていたとされる。

(二) 王建集團を中心とした武臣官僚（主に王建との假父子關係者）。先に述べたような王建との假父子等の關係を持つ職業軍人的集團であり、その武臣間は王建を中心とした戰友的仲間意識に基づいたものであったとする。

(三) 地方で實際に行政を擔當する縣令以下の官吏。先に擧げた松井秀一氏の説を承け、中央の絶對的王朝であった唐に對する歸屬感から、唐朝の文臣官僚制度の繼承を筆頭とする「唐朝的」在地秩序を掲げ、對内外の軍事的優位を保つ限りは、前蜀に對して從順であったとしている。

(一) 中央文臣官僚は、唐朝の文臣官僚制度を繼承する際の前蜀政權の裝飾的役割の擔い手であったとするが、王建はそれらに文學の士を廣く求めたのであつて、實質的な文臣官僚制度の擔い手として王建から求められたのは僅かな人々でしかなかったとしている。(二) 王建集團を中心とした武臣官僚は、前蜀政權下において、刺史や軍使以上の武臣官僚であつた。彼らの根底は王建を頂點とする職業軍人的アウトロー集團であり、王建の求めた軍政面における官僚制度というものを受け入れなかつた。すなわち、前蜀の文武どちらにしても唐の官僚制度の實質的繼承という意味合いからは程遠いものであつたとしている。そして(一)と(二)とは、その性格と政權内の役割

から、前蜀の民政や財政を擔う者は幾人もおらず、前蜀政權は民政・財政不在の政權であつたとし、それを實際に擔當したのが(三)縣令以下の官吏であつたとされる。

そしてその三つのカテゴリーにはそれぞれ越境し難い深い溝があり、それは政權としての不安定さをもの語り、さらに王建の死後、その崩壞が加速して結局は短命政權として滅亡していった、とされる。

確かに佐竹氏の論考は、王建と前蜀政權というものを廣く細かく調査されたものであると認められる。やはり現況ではこれを踏まええずして前蜀政權を論述することは出来ないであろう。筆者も概ね佐竹氏の論を踏まえつつ、以下を論じていく。

### 三、前蜀の「唐の名臣世族」と知識人

前蜀政權には中央(中原)から蜀の地に唐末の混亂を避けて入蜀した唐朝の名門の子弟や知識人達が多數いた。先主王建と後主王衍は、その人々を或いは國政の中樞に据え、或いは國師として厚遇した。佐竹氏は、王建がこれらの人々を唐朝の制度を繼承する爲の裝飾的役割であつたとする一方で、「唐代の四川と中央との間には著しい社會的格差とそれに基づく差別體制があつた。そしてその故にこそ、四川の在地有力者たちは、唐朝的秩序に對して一種の強力な歸屬感をもつており、そこで「唐の名臣世族」たちを政權内に多數内包して唐朝の制度・文物を繼承させることで、「東西兩川の在地有力者たちに、王建が唐朝的秩序の擁護者としてふるまおうとしていることを知らせ、そのことによつて在地秩序の安定に貢献した」とし、前蜀政權の在地支配において現實的な意味で重要な存在であつたとする。

民政・財政不在であつた前蜀政權の中で、行政面を擔當した縣令以下の官吏たちこそが在地有力者そのものであり、彼らの協力を得る爲に有效なシンボルとしての存在意義が「唐の名臣世族」たちに生じた、と佐竹氏は指摘しておられる。筆者も概ねそれに賛同するのだが、今一度具體的に「唐の名臣世族」と知識人たちについて論じてみたい。(筆者は「唐の名臣世族」と言っているが、それには唐朝の名門出身以外にも、唐朝に何らかの縁ある者や、唐朝から文官職を與えられていた者達も含めてゐる。唐朝から文官職を與えられることはすなわち、その多くが唐朝貴族であることを示していると思われるので、やや誇張された感はあるが、「唐の名臣世族」という語を使用したいと思う)

さて、「唐の名臣世族」たちに言及している具體的な例としては、『新五代史』卷六十三前蜀世家卷三に、

(天復) 七年秋九月己亥(王) 建乃ち皇帝の位に即く。……、韋莊を左散騎常侍と爲し、中書門下の事を判せしめ、……、張格、王鐸は皆な翰林學士と爲す。……、蜀險を恃みて富み、唐の末に當り、士人多く建に依り以て亂を避けんと欲す。建盜賊に起こると雖も、而れども爲人智詐多く、善く士を待す。故に其の僭號し用ふる所は、皆な唐の名臣世族なり。(韋) 莊は、(韋) 見素の孫、(張) 格は、(張) 潛の子なり。<sup>(八)</sup>

とあり、王建が蜀の地で皇帝の位に即いた時、韋莊や張格などの唐朝の名臣達の子孫を重用したことを記述している。また、何故厚遇したのかという理由は、同じく『新五代史』同上に、

(王) 建左右に謂ひて曰く、「吾神策軍將爲りし時、禁中に宿衛し、天子夜學士を召し、出入間無く、恩禮親厚寮友の如きを見ゆ。將相比すべきに非ざるなり。」と。故に(王) 建格等を待する恩禮尤も異なり。其餘の宋珫等百餘人、竝びに信用せらる。<sup>(九)</sup>

とあり、王建自身が、天子(唐の僖宗)が學者や知識人を厚遇するのを見て、それに深く感じ入ったからのよう



ある。だからこそ、王建は張格等をもっとも厚遇したのだと看取できる。『五代史補』の史料にも同様の記述がみえ、王建を褒め稱えている。しかし、唯だそれだけを以て厚遇したとは言えなからう。『舊五代史』卷一百三十六 僭偽列傳第三に、

(王) 建、雄猜にして機略多く、意嘗に測り難し。

とあり、機略に富むとされる王建が単にそれだけで重用したとは言いがたい。さらに『資治通鑑』卷二百六十六の條に、

蜀主(王建) 日は書を知らずと雖も、書生と談論するを好み、其の理を粗曉す。是の時、唐の衣冠の族多く亂を避けて在し、蜀主禮して之を用ひ、故事を脩擧せしむ。故に其の典章文物は唐の遺風有り。

とある。これは前蜀政權自體が、唐の後繼政權であるということを示している記述である。先に引いた『新五代史』は、王建の個人的な體驗による「唐の名臣世族」や知識人たちを厚遇したことを述べ、後に引いた『資治通鑑』は、王建の個人的な面から展開し、政權内における「唐の名臣世族」達の役割と作用を述べている。その役割と作用とは、「故事を脩擧せしむ」ことであり、「其の典章文物は唐の遺風有」るものになったことである。『蜀橋杙』卷上に、

(蜀之永平二年) 三月、平章事張格に詔し、専ら開國以來の實錄を編纂せしむ。

とある。「故事を脩擧せし」めた後に、自國の國史を編纂させることは當然であろうと思われ、「故事を脩擧せしむ」ことの發展として捉えられよう。「其の典章文物は唐の遺風有り」ということについては、『蜀橋杙』卷上の章莊についての條に、

(武成三年) 八月、吏部侍郎・平章事章莊卒す。莊字は端己、杜陵の人、(韋)見素の後なり。乾寧中、進

士に擧げられ、(王) 建奏して掌書記と爲さしむ。…(中略)…建の國を開くや、制度號令・刑政禮樂、皆な莊の定むる所なり。平章事を拜す<sup>(十四)</sup>云々。

とあり、王蜀政權内において「唐の名臣世族」の領袖的人物であつたと考えられる韋莊が、王蜀の具體的な制度を定めたとしている。これらは佐竹氏が示唆しているように、唐を繼いだ政權であると誇示する上で重要なことであつた。實際に『資治通鑑』卷二百六十六開平元年の條に、

蜀王(王建)將佐を會し帝を稱するを議す。皆な曰く、「大王唐に忠なりと雖も、唐已に亡べり。此れ所謂『天與ふも取らざる』者なり」と。馮涓獨り獻議し蜀王を以て稱制するを請ひて曰く、「朝興らば則ち未だ臣と稱するに爽かず。〔爽は、乖なり。言ふところは、若し唐朝復興せば則ち臣爲るの節未だ乖かざるなり、と。〕賊在らば則ち惡を爲すを同じくせず」と。王從はず。涓門を杜して出でず。〔馮涓は、馮宿の孫。唐室既に亡ぶるの後に於ても、義は故主に存す。韋莊・張格の輩に視ぶるに間有り。〕王安撫副使・掌書記韋莊の謀を用い、吏民を帥ゐて哭すること三日。己亥、皇帝の位に即く。國を大蜀と號す。<sup>(十五)</sup>〔内は胡三省の注。〕とあつて、唐朝と決別する際にも「唐の名臣世族」である韋莊の謀を用いた。唐朝の後繼王朝たらんとする姿勢を、政權内外に示した記述である。

「唐の名臣世族」たちに自己の政權の制度を整えさせることは、唐朝の後繼王朝たらんとする上で、形式と建前において箔を付けることになる。そして唐を繼いだ正統政權であることを誇示したならば、周圍から度が過ぎると言われる程厚遇した「唐の名臣世族」たちの忠誠心を、王建自身への忠誠心として切り替えさせることに繋がるのである。「將佐」に皇帝即位を集議させた時、「皆」の者たちが『史記』<sup>(十六)</sup>などから引用して「天與不取」いう言葉を使用している。その言葉を選んだ者は紛れもなく「唐の名臣世族」に代表される文學の士であらう。「天與不取」

に對應する語が、「反受其咎」や「悔不可追」などの強迫的概念を含むことから、「唐の名臣世族」らが積極的に新政權樹立に荷擔していたことを示すものである。事實、王建は韋莊の謀を用い、官吏・民衆を率いて唐朝との離別を公示する爲のセレモニーを行っている。それは王建の要求と「唐の名臣世族」たちの積極性が合わさったものに他ならない。

『資治通鑑』引用文中に胡三省の注も入れたが、そこには馮涓と韋莊・張格らとの對立が見て取れる。『資治通鑑』の記述だけでは、馮涓一人の反對であるとも取れる。しかし、前蜀政權が成立する（王建の皇帝即位）以前に、すでに「唐の名臣世族」と目される人々の中にも對立構圖があつたことを豫想させる。

馮涓は、恐らく漢王朝などを意識の中に入れて唐が再興された際の危惧をしているのだが、一方の韋莊・張格らは唐朝を見切り、王建の意向を汲んだと見なせる。そこにこそ韋莊・張格ら「唐の名臣世族」たちの忠誠が（建前上であつたとしても）唐朝及び唐朝皇帝から王建が樹立する政權と王建本人に移行していったことを物語っている。

佐竹氏は「唐の名臣世族」や知識人たちを、前蜀が唐朝官僚制度を繼承する際の裝飾的役割として位置付け、さらに彼らの多くは専ら文學の士であり、實質的な政權の擔い手はそれ程いなかったとされているのは先述した次第である。勿論、佐竹氏が述べるように、裝飾的役割も備えていたことは間違いないであろう。しかし、王建が「故事を脩擧」することを彼らに求めたのは史料が明らかにしており、それは文學の士として名聲有る知識人達、ましてや唐朝に直接縁ある「唐の名臣世族」達に「故事を脩擧」という役割を充て、前朝或いはそれ以前の故事を修めさせ自政權の正統性誇示に振り替えさせたことを意味している。佐竹氏はその論著の觀點から、在地有力者や四川地域内に對してにのみその正統性の焦點をあてている感があるが、對外的な意味合いも當然有っていたであろうと筆者は考へる。さらに、政權内に専ら文學の士を多數迎え入れた所以は、佐竹氏のいう王建集團（王建が皇帝

即位し前蜀政權を樹立するまでの、彼を中心とする軍事集團。假父子の關係にある者たちを中心とした集團)には、抑も文學的、或いは文官的素養を有する者が皆無であり、複雑な典故や文章作成の擔い手が存在せず、政權を樹立する爲に不可欠な政權中央の文官たちが空白となっていた。そこに彼ら「唐の名臣世族」たちが都合よい存在としてあつたのだろう。そして「唐の名臣世族」たちは積極的な姿勢を自ら有して、それに取り込まれていたのである。

そのようにして、王建は文武雙方の面で盤石な體制を整えようと畫策したのであり、その構想は彼が軍事集團を形成し蜀の地で跋扈していた際には、既に擁していたのかもしれない。

右で述べたことはつまり、前蜀皇帝としての王建自身が示す正統性にも繋がらう。唐朝皇帝が「夜學士を召し、出入間無く、恩禮親厚寮友の如」くしているのを見た王建は、それに傾倒し踏襲していることを示すことで、唐朝後繼王朝の皇帝であることを誇示出来たのではないか。『五代史補』(『五代史書彙編』收)卷一杜光庭入道に、

杜光庭、長安の人、九經の擧に應ずるも第せず。時に、長安に潘尊師なる者有り。道術甚だ高く、僖宗の重んずる所と爲り、光庭素より希慕する所にして、數ば其の門に遊ぶ。僖宗の蜀に幸するに當り、蜀中の道門の牢落を觀、名士を得て以て之に主張せしめんことを思ふ。駕回り、潘尊師に詔し、兩街に使いし其の可なる者を求めしむ。尊師奏して曰く、「臣、兩街の衆の道聽塗説するを觀ゆ。一時の俊は即ち之有るも、掌教の士に至りては、恐らく未だ聖旨に合應せず。臣、科場中に於て九經の杜光庭を識る。其の人性簡にして氣清く、量寬くして識遠し。且つ風塵に困し名利を脱屣せんと欲するを思ふこと久し。臣愚を以て之を思はば、光庭に非ざれば不可なり」と。僖宗召して之に問ひ、一見して大悦し、遂に披戴せしむ。仍りて紫衣を賜ひ、號して廣成先生と曰ふ。即日、馳驛し之を遣る。王建の蜀に據るに及び、之を待すこと愈厚く、又た號して天師と爲

す。光庭嘗て、道・徳二經の注者多しと雖も皆な未だ其の旨を演暢する能はざるを以て、因りて廣成義八十卷を著す。他術是と稱し、識者之を多とす。<sup>(十七)</sup>

とあり、僖宗の親交を受けていたとする杜光庭を、王建はやはり厚遇している。これは單なる偶然ではあるまい。王建が杜光庭を「待すこと愈厚」く「號して天師と爲」したという記述の時間的整合性はともかくとして、前蜀の皇帝である王建が、唐朝皇帝に寵愛を受けた人物を意圖的に厚遇したことは、<sup>(十八)</sup>唐朝皇帝と唐朝そのものの後繼者であり後繼政權たらんとすることを誇示している證と受け止められよう。王建は杜光庭だけに止まらず、四川出身の知識人たちも多く政權に取り入れている。唐朝皇帝の行爲を模範としていることを公言し、實際に知識人たちを多く抱えることによつて、四川在地のインテリ層（その多くが在地有力者かそれに縁故がある者と推測出来る）にも直接的に自己の正統性などをアピールできえたのである。

以上が、前蜀政權における「唐の名臣世族」や知識人たちの扱われようとその意圖である。無頼の身であった王建とその集團は、文人的素養はほぼ皆無と言つてよい。しかし、王建はその唐朝皇帝の側近く仕えていた、という經驗から得た彼ら「唐の名臣世族」の利用價值を驅使し、「唐の名臣世族」や知識人たちを多數受け入れた。文人的素養を必要とする「故事を脩擧」することや國史を修めるといった、（蜀地域においては）眞つ當な政權であるということを示す爲に、建前上必要であつた事務方の作業を請け負わせ、政權内の官僚制度なども「唐の遺風有」るものにし、その唐朝的官僚制度の象徴として、四川地域支配を圓滑化する一助とした。そうして「唐の名臣世族」たち自體を政權内外に示す正統性として存在させたのである。

#### 四、王建の養子假子たち

王建の養子假子たちを論ずる前に、栗原益男氏と佐竹靖彦氏が唐末五代當時の假父子的結合について論じているので、それを概観した後、王建の養子假子たちに言及してみようと思う。

栗原氏は「唐五代の假父子的結合の性格——主として藩帥的支配權力との関連において——」<sup>(三十二)</sup>の中で、隋末唐初から唐末五代にかけて、假父子的結合が集中的に現れる時期を三期に分類し、その上で假父子的結合について言及されている。抑も、假父子的結合とは隋末から五代にかけて、随時現出するものではなく、ある時期に限って集中的に史料に現れるものであり、そのある時期とは隋末唐初（第一期）、安史の亂前後（第二期）、唐末五代（第三期）とされ、「その三期の共通の様相は王朝支配權力の消滅期弱少期」であり、そして假父子的結合には集團型假子と個人型假子の二つの形態があるとしている。第一期に出現する高開道の假子數百人や、第二期の安祿山の假子である曳落河八千餘人などは集團型假子であるとし、その集團型假子とは、「假父のもつ強大な專制的奴隸主的家父長權力」に「無批判的隸從的」であつて「奴隸的無主體者的性格」を有し、個人ではなく「部隊という集團單位で行動し、假父對象者との結合關係は「假父への叛逆がないという事實によつても知られる如く、非常に強靱なものである」つて、「（假父・假子）兩者の性格からくる結合のこの強固さは、假父が集團型假子を設定した際に親衛隊的役割をもたせる」ことがほとんどであつた。一方の個人型假子は、「あくまで假父と個人的に、その限りでは一對一において擬制的父子關係を結んでいるものであり、その「機能の面では、集團型假子が兵的作用をもつて部隊として機能を發揮したに對し、」「個人として機能を發揮」するものであり、さらに家僮・帳下型假子と武將・

降將型假子という兩極ともとれる性格をもつ二種類の型に分類できるとする。家僮・帳下型假子は、集團型假子に見られるように「隷從的」ではあったが、「節度使・刺史・軍將など當時の社會における中核的役割を」個人として果たしており、「奴隸的無主體者的性格」の集團型假子より主體性を有した、とする。武將・降將型假子は、その武將・降將が保有する兵力を假父對象者（主に群雄や宦官）が自己の麾下に組み入れることができ、武力の増強擴大といった點では假父對象者にメリットがあるが、もともとが武將・降將であることと、その結合が互いの利害得失による所が大であるが故に、「世間的に既に著名で實力も保有しており」「家僮・帳下型の如く深く深く假父に對して隷從性を帯びることはなかつたし、獨立的性格をより保持していた」とする。そして「一般的な傾向として、奴隸的性格の濃い集團型假子は第一二期に集中してみられ、第三期には殆ど出現して」おらず、第三期の假父的結合は個人型假子が大體を占めていたことを指摘されている。以上が栗原氏が論ずる唐末五代における假父的結合の概要である。唐末五代の假子は個人型假子の時代であつたことがわかる。王建の養子假子たちもその例に漏れず個人型假子の集團であり、養子假子は王姓と「宗」の輩字を授かつた。例えば、王宗佶・王宗侃・王宗滌・王宗弼のようにである。

栗原氏はつづいて「唐末五代の假父的結合における姓名と年齢<sup>（二七）</sup>」で、王建の假子と假孫たちについて相應に言及されているが、佐竹靖彦氏が栗原氏の説を承けた上で前蜀政權と王建の養子假子たちを論じているので、それを見ていきたい。

佐竹氏は『唐宋變革の地域的研究』『王蜀政權小史』において、「王建集團における假父子關係は、帳下型と降將型を二つの主軸」を中心としていとされ、さらに王建集團が四川を征服した過程を、（一）西川征服期（光啓三年＝八八七～乾寧元年＝八九四）の八年間、（二）三川統一期（乾寧二年＝八九五～天復三年＝九〇三）の九年間、

(3) 内政整備期 (天復四年 $\parallel$ 九〇四 $\parallel$ 永平三年 $\parallel$ 九一三) の十年間、(4) 政權解體・滅亡期 (永平四年 $\parallel$ 九一四 $\parallel$ 咸康元年 $\parallel$ 九二五) の十二年間の四つに分け、「栗原益男氏は資治通鑑の記述をもとに」(光啓三年(八八七)三月、王建が閩州の攻略に成功した七ヶ月あとの、同年十一月に、王宗瑤・宗弼・宗侃・宗辨らの假子の名が初出し、その三年後の大順元年(八九〇)に王宗儒、大順二年(八九一)王宗渥・宗阮・宗本が假子になっていることに注目し、王建の假子の相當數がこのころまでに設定されたものと推測されている)ことを受け、『九國志』記載の王宗侃・王宗瑤・王宗弼の傳をもとにして、「王建が閩州を陥し、成都にむかうまでの半年ばかりの間に假子制度が始まった」と指摘している。佐竹氏が區分した(1) 西川征服期の時期に王建集團の假父子制度が開始されたことになる。そして「王建集團における假子關係は、本來の仲間的集團原理を基礎としながら、これを上下の關係に組み變え、しかもそれを外部に明示することによって新規加入者の場を創出した」としている。

さて、これらはどういうことかといえは、王建を中心として行動を共にしていた戰友的な仲間意識に基づいた横の繋がり(義兄弟に近い關係)で紐帶されている、ある種の閉塞性すらもった軍人集團の中から、王建が假父となつて姓名を與え假子とすることにより、横から縦へとその繋がり變化し、その閉塞性の強い横の繋がりはそのままに、外部の者を吸収しやすくした、ということである。本來は王建と關係性の薄い、或いは全くない集團外部の者でも、王建の假子の一員となることで、集團がもつ閉塞性を突破して、逆に同列という親近性を得ることができたのである。

王建のもとで行動を共にして假子となつた者は帳下型假子、王建のもとに既に武將格で降つてきた者を降將型假子と見なせる。降將型假子が單身で集團に參入することはなく、統べる兵力を率いてくるのだから、王建集團そのものの軍事力擴大となる爲、自勢力擴大には好都合であつたらうし、實際に擴大させていったことは、既に栗



原・佐竹兩氏が論文中で言及している。

『資治通鑑』は、王建の養子假子たちは百二十人もおり、その全てが功臣であったと記述している。假子たち（職業軍人的集團）の性格から、それが文臣的功績のはずがなく、百二十人すべてが軍功により姓名を與えられたと考えて間違ひなからう。その軍功とは、敵を攻略することに力を發揮したことはもちろんのこと、降將型假子のように兵力を保有して降つてきた<sup>(二五三)</sup>ということなども同等に軍功とされたのである。

右で長々とはあるが、唐宋五代の假父子的結合と前蜀政權内の假子たちの特徴のひとつを紹介した。養子假子各自の詳細や前蜀政權内での位置附けなどは、概ね栗原・佐竹兩氏の論文で既に論じられており、現時点での筆者の力量ではそれに言を施すことは難しいのだが、兩氏が言及していない王建の養子假子たちの特徴について論じてみたいと思う。『資治通鑑』卷二百六十七の條に、

（後梁の開平四年、蜀の武成三年十一月）蜀主（王建）太子宗懿の名を更め元坦と曰ふ。庚戌、假子宗裕を立て通王と爲し、宗範を夔王と爲し、宗鑑を昌王と爲し、宗壽を嘉王と爲し、宗翰を集王と爲す。其の子宗仁を立て普王と爲し、宗輅を雅王と爲し、宗紀を褒王と爲し、宗智を榮王と爲し、宗澤を興王と爲し、宗鼎を彭王と爲し、宗傑を信王と爲し、宗衍を鄭王と爲す。<sup>(二五四)</sup>

とあり、王建が假子の王宗裕等と實子である王宗仁等を諸王に封じた事を述べている何等變わりのない文章だが、その後文に、

初め、唐宋の宦官兵を典る者、軍中の壯士を養ひ子と爲し以つて自強すること多し。（田令孜・楊復恭の類の如きなり。）是より諸將も亦た之に倣ふ。而して蜀主尤も多し。惟だ宗懿等九人及び宗特・宗平は眞に其の子なり。宗裕・宗鑑・宗壽は皆な其の族人なり。宗翰は姓は孟、蜀主の姊の子なり。宗範は姓は張、其の母周

氏蜀主の妾爲り。自餘の假子百二十人は皆な功臣なり。冒姓連名すと雖も而も婚姻を禁ぜず。(史は假父假子皆な利を以て合するは、人倫の正しきに非ざるを言ふ。)<sup>(二十七)</sup>

(尚、(田令孜・楊復恭云々)などの括弧内の文章は胡三省の注である。)

と記述し、田令孜や楊復恭等の兵權を持つ宦官の故事を擧げ、諸將はその故事に倣つて、多くが養子を取つて自ら勢力を強くしたと記している。さらに、その諸將の中でも蜀主王建が一番多かつたとし、王建の實子と族弟及び譯ありな假子の説明の後、その他の假子である百二十人は皆な功臣であるとしている。そして、假子間での婚姻も禁じはしなかつたと附して、『資治通鑑』の本文はこの文章を終えている。(胡三省は注を附し、假父子の制度、或いは制度といえるような流行、風潮を痛烈に非難している。胡三省の注は彼の思想を考察するのに興味深いものがある)假父子制度の根本的な部分を知ることができる有意義な史料といえよう。

さて、ここで注目されるべきは「冒姓連名すと雖も而も婚姻を禁」じなかつたことである。しかし、筆者の探す限りでは、王建の養子假子たちが婚姻を結んだということを具體的に記している史料は見當たらない。だが、『資治通鑑』中でわざわざ記しているということは、婚姻が實際に行われていたことを意味しているはずである。そこから推してみれば、元來、王建と戰友的な仲間意識に基づき閉塞性のある横の繋がりで結ばれた軍人集團から派生した王建の養子假子集團は、その假父子的結合によって得られた開放性により、王建と直接の關係性を持たない集團外部の武將や降將、四川地域の異民族・土豪などを受け入れることを可能にした。しかし、そこには古參・新參という明確な區別があつたことは想像でき、その區別は古參假子(主に帳下型假子たち)が元來有する假父王建との仲間意識も相俟つて、新參假子(主に降將型假子たち)との間に微妙な關係をもたらしかねない。そこで王建は、養子假子同士の婚姻を認めることで、その集團内における古參新參という微妙な關係を解除できるようにし、尚且

つ婚姻を紐帯とした關係をつくらせることにより、養子假子集團内に具體的・實質的な横の繋がりをもち、その養子假子間同士の仲間意識を強固にさせようとしたのではないだろうか。

その養子假子集團の仲間意識をうかがわせるものが『十國春秋』の王建の養子假子たちの傳にある。『十國春秋』卷三十九 王宗弼傳に、

王宗弼、本姓は魏、名は宏夫、高祖（王建）録して假子と爲し、今の姓名に更む。楊守厚の梓州を攻めるや、高祖 華洪等をして顧彥暉を救わしめ、師を犒ふに因りて之を執ふるを謀る。宗弼乃ち密語を以て之を彥暉に泄らすも、高祖殊に意を爲さず、之を待すこと初めの如し。已にして高祖の東川を攻むるに従ふも、東川の兵の擒ふ所と爲り、彥暉 舊恩を念ひ、畜して子と爲す。彥暉の敗るるに及び、復た自ら高祖に歸す。功を積み（二十七）て兼中書令に至り、北面行營招討使に充てらる云々。

とあり、なんと王宗弼は王建の假子であるにも関わらず、敵である顧彥暉の兵に捕縛された時、顧彥暉の假子となつていたのである。その後、顧彥暉が破れた時には、自ら王建に歸し、功績を積んで出世したというのである。

さらに、『資治通鑑』卷二百七十三 同光元年十二月の條に、

乙亥、蜀主（王衍）前武德節度使・兼中書令徐延瓊を以て京城内外馬歩都指揮使と爲す。延瓊外戚なるを以て王宗弼に代り舊將の右に居り、衆皆な平かならず。（二十七）

とあり、王建の死後その子王衍が前蜀の帝位に即いていた時、外戚である徐延瓊が王宗弼に代わつて舊將（王建の養子假子集團を中心とする武臣集團）の上に立ったというのであるが、王宗弼が王建死後に武臣集團のトップに立つていたことを示す記事でもある。王宗弼が王建の假子から顧彥暉の假子となり、再度また王建の假子となつたこと自體は、王建の個人的器量の問題でもあつたかも知れない。（二十七）しかし、養子假子たちが彼を集團内に再度受け入

れられるという態勢がなければありえないであろう。それまで彼らを結びつけていた養子假子集團としての強固な仲間意識と、王宗弼自身の集團内での地位があればこそである。そして、王建の死後、武臣集團のトップに立っており、外戚である徐延瓊が彼がいるその位置に取って代わったことで、「衆皆な平かならず」と動搖を見せるのは、彼が養子假子集團の象徴であつたからであり、彼が追いやられたことで集團の存続に對する危機感のあらわれを示しているのである。

## 結び

前蜀政權には、「唐の名臣世族」たちと王建の養子假子集團という二つの特徴的な集團が存在した。唐末五代の群雄や宦官は、養子假子たちを麾下に置くことで自勢力の擴大を圖ることが多く、前蜀を建てた王建も養子假子集團を擁し、その政權の軍事面における中心に据えた。王建の養子假子集團は、王建を中心とした行動を共にしていた戦友的な仲間意識に基づいた横の繋がりをもちつ軍人集團から派生したものであることは、すでに佐竹氏が述べられている通りである。そしてさらに、その集團内の婚姻を禁じないことで、外部からの參入者である降將型假子などにも、婚姻という具體的紐帶による横の繋がりをもちえることを示して、集團内部の仲間意識の強化を圖つたことを豫測させる。

一方で「唐の名臣世族」たちは、文人的素養をもたない王建集團のその空白を埋める爲の要員（佐竹氏の言を借りれば裝飾的役割）として、そして前蜀政權が唐朝の後繼政權であると内外に示す正統性の一つとして存在し、唐朝を見切つても、「唐の名臣世族」で在り續けることではしかそのアイデンティティを持ち得なかつた儂い集團でも

あつた。

唐末五代の時期、各地に現れた群雄たちは、その殆どが無名の人々であり、唐朝の衰亡によつての上上がった成り上がりである。その群雄たちの麾下に置かれた養子假子集團に所屬する者たちは、假父の「成り上がり」に附隨して自身の社會的地位をより高みに昇らせようとした者たちであつた。唐朝が滅亡した後に来るであろう亂世に可能性を見出そうとした者たちであつたといえる。そのような養子假子集團と、唐朝が滅亡してもそれに依存していかなければ自身を成り立たせることができない「唐の名臣世族」と政權内支配構造とを併存させた前蜀政權は、五代十國期において特徴ある政權であつたといえよう。

## 注

(一) 『五國故事』卷上前蜀王氏の文に、

及梁太祖受禪、乃僭大號。梁祖以其俱爲唐朝勳舊、不敢傲之。又以岐・隴不附、欲假建爲腹背之患。乃與之通和、使介交質、情好尤篤。建初書與梁祖、曰七十州自可指揮、八千里罕因開圉。又曰、俱非恃強逼禪、皆以行道濟時云。

とあり、王建が皇帝位に即いた際、後梁の朱溫は書を送つており、兩國間の和を求めている。「岐・隴」とは岐王李茂貞のことであり、當時、後梁と前蜀の國境に割據していた群雄である。その對策も含んだ通和であるから、打算的であるといえはそうなるが、互いが「唐朝勳舊」であつたことにも依據しており、「情好尤篤」であつたといふのであるから、打算とは別の思いもあつたのだろう。

書面上の遣り取りをより詳しく載せているのが、宋の勾延慶『錦里著舊傳』である。その卷第六武成三年

の條に、

三年、大梁遣使通聘、書曰、……、且念與皇帝八兄、頃在前朝、各封異姓。土茅分裂、皆超將相之尊、魚雁往來、久約弟兄之契、歡盟甚固、功業相推。俄阻絕於音塵、止因緣於間諜、以致時衰土德、運應金行。雖手足胼胝、粗平多難。而星辰符瑞、謬付朕躬。當百辟之羣情、極四方之積患。爰都河洛、用答乾坤。尋聞皇帝八兄奄有西陲、盡朝三蜀、別尊位號、復統高深。一時皆賀於推崇、兩國願通於情好。徵曹・劉之往制、各有君臣、追漢・楚之前蹤、常分疆宇。所冀同清夷夏、俱活生靈。(以下略)

とあり、その下文に王建の返書として、

大蜀皇帝謹致書於大梁皇帝閣下。竊念早歲與皇帝共逢昌運、同事前朝。俱榮倚注之恩、竝受安危之寄。豈期王室如燬、大事莫追、橫流泛濫於八方、衰燹凌夷於九廟。此際與皇帝同分茅土、共統邦家。……、永言梁蜀之歡、合認弟兄之國。(以下略)

とある。朱温が王建に對し、推して兄として用ゐることや、『五國故事』で見たように兩國間の和を要請し、ともに天下をよく統治しようとしているのがわかる。それに對して王建は、「前朝(唐朝)」にともに仕えたという事實に言及し、この際中華の地を分けて、ともに各自の國家を統治しよう、としている。さらには、「弟兄之國」として互いに認め合おうとも言っている。

右に擧げた『錦里著舊傳』の文は國書であり、多分に社交辭令が含まれたものであることは當然である。しかし、それを差し引いても、兩國が對等か、もしくはそれに近い遣り取りであったことは確かであろう。

(二)

十國の君主で例を擧げてみると、楊行密という人物は、元々盜賊であったが軍に入隊して頭角を現し、呉という政權を建てる。馬殷という人物は、若い時には大工であつたが、秦宗權が兵を擧げた際、その軍に應

募・入隊し臺頭していき、楚という政權を建てるまでに至った。呉越政權を建てた錢鏐は、無頼漢であり鹽賊であった、等。

楊行密は『新五代史』卷六十一 呉世家第一に、

楊行密字化源、廬州合淝人也。爲人長大有力、能手舉百斤。唐乾符中、江・淮群盜起、行密以爲盜見獲、刺史鄭榮奇其狀貌釋縛縱之。後應募爲州兵、戍朔方遷隊長。

馬殷は『舊五代史』卷一百三十三 世襲列傳第二の馬殷傳に、

馬殷字霸圖、許州鄆陵人也。少爲木工、及蔡賊秦宗權作亂、始應募從軍。

錢鏐は、『新五代史』卷六十七 呉越世家第七に、

錢鏐字具美、杭州臨安人也。……及壯無頼、不喜事生業、以販鹽爲盜。

とある。

(三) 後蜀の開祖である孟知祥は太原の武家出身で、後唐に仕え、後唐の莊宗が兵を派遣して前蜀を征伐して後、

この孟知祥に四川の地を任せただが、後唐の皇帝が莊宗から明宗へと變つた際に自立を企て、後唐の内部分争の間に乘じて皇帝の位に即いたという切れ者であり、これまた興味をそそる人物である。それはその政權も含め、後日別稿にて論じたいと思う。

(四) 年號は、『蜀檮杌校箋』が考證をおこなつてはいる。

(五) 松井秀一「唐代前半期の四川―律令制支配と豪族層の出現を中心として―」(史學雜誌、七一―一九・山川出版

版社・一九六二、九)

(六) 右同「唐代後半期の四川―官僚支配と土豪層の出現を中心として―」(史學雜誌、七三―一〇・山川出版社・

(七) 佐竹靖彦『唐宋變革の地域的研究』(東洋史研究叢刊之四十四・同朋舎出版・一九九〇、二)

(八) (天復七年) 秋九月己亥、建乃即皇帝位。(中略) 韋莊爲左散騎常侍判中書門下之事、(中略) 張格・王鐸皆爲翰林學士。(中略) 蜀恃險而富、當唐之末、士人多欲依建以避亂。建雖起盜賊、而爲人多智詐、善待士。故其僭號、所用皆唐名臣世族、莊、見素之孫、格、潛之子也

(九) 建謂左右曰吾爲神策軍將時、宿衛禁中、見天子夜召學士、出入無間、恩禮親厚如寮友。非將相比也。故建待格等恩禮尤異、其餘宋玘等百餘人、竝見信用。

(十) 『五代史補』卷一「王建禮待翰林學士」に、

王建之僭號也、惟翰林學士最承恩顧。侍臣或諫其禮過。建曰蓋汝輩未之見也。吾昔在神策軍時、主内門魚鑰、見唐朝諸帝待翰林學士。雖交友不若也。今我恩顧比當時、才有百分之一爾。何謂之過當耶。論者多之。

とある。

(十一) 建雄猜多機略、意嘗難測。

(十二) 蜀主雖目不知書、好與書生談論、粗曉其理。是時唐衣冠之族多避亂在、蜀主禮而用之、使脩舉故事。故其典章文物有唐之遺風。

(十三) (蜀之永平二年) 三月、詔平章事張格、專編纂開國以來實錄。

(十四) 蜀之武成三年) 八月、吏部侍郎・平章事韋莊卒。莊字端己、杜陵人。見素之後。乾寧中舉進士、建奏爲掌書記。…(中略)…建之開國、制度號令刑政禮樂、皆莊所定。拜平章事云々。



(十五) 蜀王會將佐議稱帝、皆曰大王雖忠於唐、唐已亡矣。此所謂天與不取者也。馮涓獨獻議請以蜀王稱制曰朝興則未爽稱臣〔爽、乖也。言若唐朝復興、則爲臣之節未乖也〕賊在則不同爲惡。王不從。涓杜門不出。〔馮涓、馮宿之孫。於唐室既亡之後、義存故主、視韋莊・張格輩有間矣〕王用安撫副使・掌書記韋莊之謀、帥吏民哭三日。己亥、卽皇帝位、國號大蜀。

(十六) 『史記』卷四十一 越王勾踐世家第十一に、范蠡が句踐に對して言つた語中に「且夫天與弗取、反受其咎」とある。『三國志』卷三十一 蜀書二 先主傳に、孔融が劉備に言つた語中に、「天與不取、悔不可追」とある。

(十七) 馮涓は、漢王朝が再興したことと、再興する過程で、蜀の地に國を建てていた公孫述が破滅したことなどを含ませていたのであろう。

(十八) 杜光庭、長安人。應九經舉不第。時長安有潘尊師者、道術甚高、爲僖宗所重。光庭素所希慕、數遊其門。當僖宗之幸蜀也、觀蜀中道門牢落思得名士以主張之。駕回、詔潘尊師使於兩街求其可者。尊師奏曰臣觀兩街之衆道聽塗說、一時之後卽有之、至於掌教之士、恐未合應聖旨。臣於科場中、識九經杜光庭。其人性簡而氣清、量寬而識遠。且困於風塵、思欲脫屣名利久矣。以臣愚思之非光庭不可。僖宗召而問之一見大悅、遂令披戴。仍賜紫衣、號曰廣成先生。卽日、馳驛遣之。及王建據蜀、待之愈厚、又號爲天師。光庭、嘗以道德二經 注者雖多、皆未能演暢其旨、因著廣成義八十卷。他術稱是、識者多之。

(十九) 『五代史補』の記述は王建の時「天師」と爲つていられるように見えるが、『蜀檮杌』の記述では、王衍の時「傳真天師」と爲つている。『蜀檮杌』の原文は「蜀之乾德三年」八月、(王) 衍受道籙於苑中。以杜光庭爲傳真天師」である。苑中に道籙を受け、その後文に杜光庭に「傳真天師」の稱號を與えているならば、

『蜀檮杌』の記述通りに受け止めた方が正しいと思われる。しかし何れにしろ、王蜀政権内において、杜光庭が先主 王建からも信頼と厚遇を受けたことには変わりはない。王蜀政権が道教に對し、その後背に唐王朝を見据え、尚且つ、蜀の道教信仰というものに留意していたことは附しておくべきであろう。

(二十) 王建のこの意圖的な厚遇の背景には、後梁の朱溫が白馬驛で唐の高級官僚達を大量虐殺した影響が少なからず有ったのかも知れない。唐朝の宰相を務めた張濬は、朱溫による白馬驛の大量虐殺後に疎んぜられ殺されているが、その子が張格である。

(二十一) 栗原益男「唐五代の假父子的結合の性格——主として藩帥的支配權力との關連において——」(史學雜誌、六二—六・山川出版社・一九五三、六)

(二十二) 右同「唐末五代の假父子的結合における姓名と年令」(東洋學報、三八—四・東洋學術協會・一九五六、三)

(二十三) 王宗本・王宗阮という假子などが降將型假子である。これについては栗原・佐竹兩氏が既に言及されているが、『十國春秋』卷三十九にある彼らの傳にある本稿關連箇所をあげておく。

王宗本、本姓謝、名從本、事陳敬瑄爲資簡都制置應援使。高祖攻成都、從本殺雅州刺史張承簡舉城來降、高祖錄其功。及敬瑄平、養以爲子、改姓名曰王宗本云々。

王宗阮、本魏道士豪、文武堅也。善舞劍器、時號爲文大劍。高祖攻陳敬瑄時、武堅執戎州刺史謝承恩來降。及成都平、更其姓名曰王宗阮。遂領決勝都知兵馬使云々。

(二十四) 蜀主更太子宗懿名曰元坦。庚戌、立假子宗裕爲通王、宗範爲夔王、宗鐵爲昌王、宗壽爲嘉王、宗翰爲集王。立其子宗仁爲普王、宗輅爲雅王、宗紀爲褒王、宗智爲榮王、宗澤爲興王、宗鼎爲彭王、宗傑爲信王、宗衍爲鄭王。

(二十五) 初、唐末宦官典兵者多養軍中壯士爲子以自強。(如田令孜、楊復恭之類。)由是諸將亦效之。而蜀主尤多。

惟宗懿等九人及宗特・宗平眞其子。宗裕・宗金歲・宗壽皆其族人。宗翰姓孟、蜀主之姊子。宗范姓張、其母周氏爲蜀主妾。自餘假子百二十人皆功臣。雖冒姓連名而不禁婚姻。〔史言假父假子皆以利合、非人倫之正。〕

(二十六) 王宗弼、本姓魏、名宏夫、高祖錄爲假子、更今姓名。楊守厚之攻梓州也、高祖遣華洪等救顧彥暉、謀因

犒師執之。宗弼乃以密語泄之彥暉。高祖殊不爲意、待之如初。已而從高祖攻東川、爲東川兵所擒、彥暉念舊恩、畜爲子。及彥暉敗、復自歸于高祖。積功、至兼中書令、充北面行營招討使云々。

(二十七) 蜀主以前武德節度使・兼中書令徐延瓊爲京城內外馬步都指揮使。延瓊以外戚代王宗弼居 舊將之右、衆皆不平。

(二十八) 王建は假父であつた田令孜を謀殺している。そのことは前蜀政權内では自明の理であつたと思われる。

それ故、王宗弼が再度假子となることにも鷹揚な態度で許さなければならなかつたとも推測できる。また王宗弼は、王建には帳下型假子として、顧彥暉には降將型假子として扱われたとしたならば、假子のタイプによる温度差で再度の假子集團入りを認められたのかも知れない。

王建が假子集團の婚姻を許した時期が、王宗弼の再度假子集團入りした前なのか後なのかは知る由もないが、前であれ後であれ、假子集團が婚姻によりその紐帶強化が可能であつたからこそ、假子集團は彼を受け入れ、王宗弼は假子集團の領袖的立場に至ることが出来たと考え得る。もしそうであれば、王宗弼の行動が筆者の提示する假子間の婚姻による紐帶強化の傍證となり得るのだが、現在有る史料が何も語りかけてこない以上、ここに推測ともつかない空論を附するのみである。